

(銀のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

人間のかんさつ

小三・町中 さくら

ぼくは奈良県のはたけで水なを食べていた。その時、急にのう家のおじさんがやって来て水なごとふくろの中に入れられた。どうなのか心配でたまらない。ドキンドキンとむねがなった。気が付いた時には谷町七丁目のスーパーにいた。ある日、あるお母さんがやって来て、ぼくの入った水なを買って帰った。ぼくは寒くて真っ暗なれいぞう庫に入れられた。お母さんがれいぞう庫を開けて言った。

「キヤー、カタツムリ」

この家の子どもはさくらと言うらしい。さくらは言った。

「このカタツムリ、何週間かかう？」

お母さんはぼくをかうためにとうめいで直方体の形のおうちを買って来た。ぼくはその中に入れられた。さくらとお母さんは図書館でカタツムリの本をかりて来た。ぼくの事を知るためだ。食べ物は一度に二しゆるいの野さいをくれる。これも本で知ってくれた事だ。おいしい野さいもあるし、きれいな野さいもある。おいしかったのはきゅうりやにんじん。ブロッコリーの葉っぱは大好物。おいしすぎて、自分の体の二倍も三倍ものりようを食べた。きゅうりは真ん中のやわらかい所がおいしい。外がわの固い皮はのこして、内がわだけ丸く食べる。きれいだったのはれんこん、ゆでた小まつな、トマトだ。ちなみにさくらはブロッコリー以外の野さいは全部大きら

---

いだ。きゅうりとにんじん、おいしいのにね。

それから、うんち。きゅうりを食べたら緑色のうんち、にんじんを食べたらオレンジ色だ。まちがってメモ紙を食べたことがあるけれど、その時は白いうんちをした。びょう気にならなくて良かったあ。うんちそうじはお母さんだけがする。さくらはぜったいにしない。さくらはぼくのうんちの数を数えるだけだ。何でだろう。

その人間の親子は時々スプレーでおうちに雨をふらせてくれる。ぼくはそれも好きだ。おうちには木のえだで遊び場も作ってくれた。それも本で調べたことだ。ぼくのせ中のからを大きくするえいようになるように、たまごのからとあさりの貝がらも置いてくれた。やさしいな。

ぼくはこの家に来たおかげで人間のことを知ることができた。人間の世界も意外といいかも。気に入った。これからも人間をかんさつしてくらしていこうと思う。

---